

Performing Arts Review (21)

「一人の道」 (1972、茶木みやこ) マラソンランナー円谷幸吉を悼む哀切の鎮魂歌

平成 23 年 5 月 10 日 中野希也

昨年の 10 月、NHK「大集合 青春のフォークソング」を見た。司会者が「当時はいろんな世間の出来事を歌った曲がありました。東京オリンピックマラソンのアベベ選手が走っているのを、私は直ぐそばで見ました。みんなに自慢したものでした。そのときは日本の円谷幸吉（つぶらや こうきち）選手は二位でした。その円谷選手のことを歌った方を紹介します。」

茶木みやこは大学在学中にフォークデュオ「ピンク・ピクルス」を結成。円谷の遺書をもとに友人が詩をつくり作曲を依頼され 1972 年に発表した。彼の両親が存命していることでもあり自ら歌うことは一年足らずで止めたが、この曲は消えることはなかった。十数年後、具志堅幸司は彼女に語った。「僕は練習中、この曲を繰り返し繰り返し聞いた。これがあったからロスアンゼルス五輪を目指しつらいトレーニングを頑張ることができた。レコードはすりきれてしまっていて、今持っているレコードは 2 枚目です。」彼は 1984 年のオリンピックで個人総合・吊り輪で金メダル、跳馬で銀、鉄棒で銅と赫々たる成績を残していたのであった。茶木はこれを聞きとても信じられなかったが「私の歌が他の人を勇気づけることができるのだ」と思いを新しくし、ふたたび 2001 年から歌い始めた。



「一人の道」 (詞・今江真三郎、曲・茶木みやこ、唄・ピンク・ピクルス)

♪ ある日走った その後で 僕は静かに 考えた
誰のために 走るのか 若い力を すり減らし

雨の降る日も 風の日も 一人の世界を 突っ走る
何のために 進むのか 痛い足を がまんして

大きな夢は ただ一つ 五つの色の 五つの輪

日本のための メダルじゃない 走る力の 糧なんだ

父さん 許して下さいな 母さん 許して下さいね
あなたにもらった ものなのに そんな生命を 僕の手で

見てほしかった もう一度 表彰台の 晴れ姿
だけど身体は 動かない とっても もう 走れない
これ以上は 走れない ♪

彼の生涯を橋本克彦著「オリンピックに奪われた命」（1999、小学館）によりふりかえる。

1940年 福島県須賀川町で円谷家の六男として生れた。

1957年 高校のとき、マラソンに精を出していた兄を見て走ってみようかと思った。

1960年 自衛隊全国管区対抗駅伝競走に出場。
区間一位は動かないと見られていたが4位に終わった。幸吉はコーチに対して声も細く謝ったあと、そのまま走っていなくなった。
やがてレースが終わりチームが帰ってきた。すると、円谷が頭を坊主刈りにして待っていた。



同僚はこう語った。

「今日は私が一番申し訳なかった。頭を坊主にしたので勘弁してくれ、と円谷君は頭を下げたのです。みんなはわかった、わかったといいながら、ちょっと驚いていました。だれにでも好不調の波があるのだから、坊主になるほどのことはないのに、円谷君は律儀でした。」信頼されたり、幸吉自身が親愛の情を持っているだれかの期待に応えられないと、この男はいてもたってもいられなくなる。期待を裏切った自分をとことん責めてしまうのである。

1961年 青森東京駅伝で三区間すべてに新記録を出し、合計で15人抜きを演じた。

1964年10月21日東京オリンピック・マラソン表彰式。NHKの実況放送。

《ウオーッ、という6万5千の大歓声。第三位、円谷幸吉、日本。2時間16分22秒8。よく頑張ってくれた。両手をあげた。真っ赤なトレーニングシャツ、トレーニングパンツ。バックスタンドに手を振って応えている。アベベ、そして円谷。いかにも嬉しそうです。この国立競技場大スタジアム、はじめて揚がりました日章旗。円谷は手を振ってカメラマンの注文に応えています。右手をあげています。いかにも嬉しそう。そして、みなさまの声援、ありがとう、ありがとう、というように手を振っています。ご苦労さんでした、円谷幸吉》聖火が燃えていた。日章旗がはためいていた。円谷は国旗に目をやり、スタンドに手を振った。満面の笑みであった。

1967年 8月椎間板ヘルニア手術。11月に退院。年末の合宿で走ろうとしたが全くついて行くことができなかった。

1968年 元旦、故郷でむかし通りに餅を食べ、翌二日は円谷家の新年宴会である。長兄の嫁がつくる巻き寿司は円谷家の名物だった。兄嫁たちの実家からもさまざまな名物が届いていた。しそ飯、南蛮漬、紋甲イカ、ぶどう酒、リンゴ…それらが正月の膳を飾っていた。三日の晩は麦飯にとろろをかけて食べる。「三日とろろ」といい、正月の習いだった。五日体育学校の宿舎に帰った。九日の日、円谷は部屋から出てこなかった。

父上様 母上様 三日とろろ美味しうございました、
干し柿、もちも美味しうございました、

敏雄兄、姉上様、おすし美味しうございました、
勝美兄姉上様、ぶどう酒、りんご美味しうございました、
巖兄姉上様、しそめし、南ばんづけ美味しうございました、
喜久造兄姉上様、ぶどう液、養命酒美味しうございました、
又いつも洗濯ありがとうございます、
幸造兄姉上様、往復車に便乗させて戴き有難うございました、
モンゴいか美味しうございました。
正男兄姉上様、お気を煩わして大変申し訳ありませんでした、

幸雄君、秀雄君、幹雄君、敏子ちゃん、ひで子ちゃん、良介君、敬久君、みよ子ちゃん、
ゆき江ちゃん、光江ちゃん、彰君、芳幸君、恵子ちゃん、幸栄君、
裕ちゃん、キーちゃん、正嗣君、立派な人になって下さい。

父上様母上様、幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまって走れません、
何卒 お許してください。
気が安まる事なく、御苦勞、御心配をお掛け致し申し訳ありません、
幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました、

校長先生、済みません、
高長課長、何もなし得ませんでした、
宮下教官、御厄介お掛け通しで済みません、

企画課長、お約束守れず相済みません、

メキシコオリンピックのご成功を祈り上げます、

一九六八・一

東京オリンピックの英雄の死を巡る諸説はむしろスポーツ界の外、文学者らの反応に多かった。円谷幸吉の死はその精神性において日本人の心の深いところを烈しく打った。

川端康成は「この簡単平易な文章に、あるひは万感をこめた遺書のなかでは、相手ごと食べものごとに繰り返される《おいしゅうございました》といふ、ありきたりの言葉が、じつに純ないのちを生きてゐる。そして、遺書全文の韻律をなしてゐる。美しくて、まことで、かなしいひびきだ」と語り「千万言も尽くせぬ哀切」と評した。また、当時の関係者からはさまざまな憶測が語られたが、三島由紀夫は、これらの無責任な発言に対し「(円谷の自殺は)傷つきやすい、雄雄しい、美しい自尊心による自殺……この崇高な死をノイローゼなどという言葉で片付けたり、敗北と規定したりする、生きている人間の思い上がりの醜さは許しがたい」と強い調子で批判した。

後年、三島由紀夫、さらに川端康成、二人共に奇しくも円谷と同じく自殺により他界した。

私は、妻の書棚の大江健三郎評論集の中に、
カルフォルニア大学バークレイ校での講演
「『新しい人』に向かって」（1999）において
三島の死にふれていることを見つけた。



「私には三島が本気でクーデターを呼びかけた、
とは思えないのです。もし本気であったとするならば、
日本でもっとも頭脳優秀な人間とみなされる大蔵省官僚
でもあった三島が、あれだけ内容空疎なクーデターの
呼びかけを準備したはずはありません。三島は、
もっとも華やかな自殺の演出を、彼にとって最も明確な、
その美意識にそくして行ったのだと思います。国家主義的な
意味づけは、二次的なものであったでしょう。

三島がひとつだけ心のなかに隠し持っていた、どうしても乗り越えることのできない嫉妬の感情のことを私は想像することがあります。私はその想像に根拠があるようにも思います。明敏な三島は、そのもう一つの自殺のように、日本と日本人の一時代をみずから表現してはいない、と知っていたにちがいないのですから。…

写真で私たちはこの長距離ランナーが、超満員の東京オリンピック競技場で、三位のイギリス選手に追い迫られている情景を見ることができます。かれはいかにも端正な容貌の若者です。走るフォームもまた見事です。走る続けるその顔は赤裸の不安を現しているのです。私はこの写真と遺書を組み合わせるだけで、1960年代の日本と日本人を代表する短編ができてあがる、とさえ思います。

そして二年後に、こちらはじつに大規模な演出をこらし、殉死者まで率いて自殺した三島由紀夫は、かれ自身の死をこれほど切実な時代の表現とすることはできませんでした。かれが、その死にあたって円谷幸吉の自殺のことを思い出したとしたなら、時代と人間との表現者として嫉妬を感じたのではなかったか、そう私は想像します。」

今、遺言を読み返してみると、類まれな、強く、正直で、礼儀正しい男が、人生を精一杯走り抜けたあと書いた文章を見て、“人工性・構築性にあふれる唯美的な作風“が特徴と評された三島と“日本人の心情の本質を描いた、非常に繊細な表現による彼の叙述の卓越さ”に対しノーベル賞を与えられた川端は、言いようの知れない無力感を禁じえなかったのではなからうか。それはフィクションである彼らの「文学」とは対極の世界であったから。